

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 153 号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2005.02.24 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の  
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_index.htm](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm)

\*\*\*\*\*発行部数 1439 部\*\*\*\*\*

---

□ 目 次 □-----

<今週の提言>飼料米か輸出米か 熊澤喜久雄

<旬を食べるー野良からの便り・18> “干しいも” 小泉浩郎

<ニュース：写真展「安心の村は自律の村」>

<エッセイ・世のなかに光るもの> 最近快かったこと 安富六郎

<79歳の意見> 農政改革にあたって戦後 60 年を省みる。 原田 勉

<日本たまご事情> その日のタマゴを食べると金運に恵まれる 齋藤富士雄

<ミニ解説>農業・農村の組織とその役割（4）ー農協ー 石川秀勇

<編集後記・同人の近況報告> 2月10日ー2月23日

---

<今週の提言>飼料米か輸出米か

作家の猪瀬直樹氏が、週刊誌で「日本の農業を9兆円から、20兆円、30兆円の大きさにするには、研究熱心な日本人が、その潜在力を発揮できるような環境をつくれればよい。そうならば補助金2500億円にも頼らない体質に変わる」と書いているのを読んだ。一種の農業補助金不要論であるが、そのように述べる背景には、東南アジア富裕層に向けた一部農産物の輸出増加や、株式会社の経営体の若干の発展例がある。

20年ほど前にも同様の論があったことを思い出した。当時NIRA（総合研究開発機構）の研究員であった叶芳和氏による『日本よ農業国家たれー21世紀の産業』（昭和59年、東洋経済新報社）がそれだ。

叶氏は、みかん、りんごなどの輸出状況も含めて、種子、飼料問題なども論じ、畜産物の自給率が高まるほど、食料自給率は減少することを指摘し、飼料稲栽培の経営的条件なども検討している。結果は「転作奨励金を前提とすれば、

エサ米は輸入トウモロコシに代替できる」であった。

しかし一方で叶氏は、米国にとって最も重要な輸出農産物であるトウモロコシの市場縮小は米国が認めないだろうと断じ、エサ米増産論は国際的視野が欠落しているとして、論議の対象から切り捨てている。その上で日本は食用米の輸出を目指すべきとしている。

米の生産調整が始まった昭和 44 年頃、このままでは、米消費の減退、休耕田の増大、食料自給率の減少が進んでしまうとして、全農（全国農業協同組合連合会）が飼料稲栽培の大規模研究を始めたが、政策的支援がなく、つぶれてしまった。

最近の農業基本計画の見直しにおいても、耕畜連携による飼料作物、稲発酵粗飼料生産等が問題に上げられている。だが、飼料米の本格的栽培には十分な議論が及んでいない。水田の持つ環境保全機能を十分に生かし、食料自給率を真に高める軌道に日本農業を乗せるために、飼料米実用化研究の軌跡を再検討すべきではなかろうか。

熊澤 喜久雄

山崎農研会員・東京大学名誉教授

y.nouken@taiyo-c.co.jp

---

<旬を食べる一野良からの便り・18> “干しいも”

---

子供の頃、冬のおやつは、決まって「干しいも」だった。サツマイモを蒸し縦に薄くきり天日で2週間ほど干したものだ。養蚕用の四角な籠に藁を敷き、その上に1枚ずつ並べ、日の当たる縁側の近くで干した。陽だまりは子供の遊び場、親の目を盗んでは出来上がらない生乾きの状態で口に入れた。当時は、品種はバラバラで美味しいものと不味いものがあった。だが子供でもその区別が出来、美味しいものからなくなった。

「ほしいも」の日本一の産地は、茨城県、磯節で有名な大洗を中心にした海岸線の畑地帯である。10月に収穫したサツマイモは、一度甘さが出るまで貯蔵する。11月下旬から2月一杯加工に入る。朝3時ごろからサツマイモの蒸し作業が始まる。乾燥は昔と同じ。1週間ぐらい天日で1枚1枚干しあげられる。

天日乾燥だから雨が降れば取り込まなければならず、雨が続けばカビがでる。この乾燥作業が労力がかかり、また神経を使う作業だ。しかもその労働は女性の肩にあった。何とか省力化できないか。そこで開発され、導入されたのが火力乾燥である。30年位前の話である。

この時、地元から相談があった。生産農家や市場の話聞き、また、朝3時からの加工作業を手伝いながら、出した結論は、当時100台近く入っていた火力乾燥機を「封印する」とした。多くの反対があった。特にお母さん達からは、やっと重労働から開放されたのにと厳しかった。

消費者が求めている「ほしいも」とは何か。それは「ほしいも」そのものではなく、「ほしいも」をとおして、燦燦と輝く太陽と太平洋からの潮風に思いを寄せ、ふるさと、手作りがセールスポイントではないか。それが、ここでもかも天日干の意味である。火力乾燥なら銀座の真中でも出来る。そうなくても、この産地は生き延びられるかと問うた。時間がかかったが、産地として火力乾燥機封印を決めた。太陽の恵みをたっぷり受けた独特の甘味と食感に多くの消費者の支持を保てたのには、そうした経過があり、いまも寒風のなか1枚1枚丁寧な手の技が重ねられているのだ。

当時、ある町長がこういった。「ほしいも」というと田舎やお年寄りをイメージしてしまう。新幹線のワゴンのチョコレートに載り、客室の中で食べもらいるようになってほしい。いま、それに近い製品が開発されている。1辺1cm程度のスティック状のもので、食べ方はポッキーに近い。これなら若者でも新幹線のなかでも違和感がない。最近中国産が出回っているが、やはり素性のわかる国産の天日干しこそ、いま旬の味だ。

小泉 浩郎  
山崎農業研究所事務局長  
y.nouken@taiyo-c.co.jp

---

<ニュース：写真展「安心の村は自律の村」>

---

戦後60年を記念して、満州農業移民の村は今どうなっているか。長野県泰阜（やすおか）村に取材したカメラマン大洞東平の写真展が開かれます。

国策に添うよりも、農民を守るための努力こそが、地方自治の原点という村

長。町村合併に乗らず、この村独自の福祉事業を継続している泰阜村に乾杯。

1. 日時 2005年、3月7日（月曜）から12日（土曜）  
午前10時から午後7時まで（ただし最終日は午後5時終了）
2. 場所 写真弘社 フォトアート銀座 「ギャラリー・アートグラフ」  
東京都中央区銀座2-9-14 電話：03-3563-0372  
（中央通り【銀座2丁目】交差点を京橋に向かって右折、徒歩1分）

<http://www.ipm.jp/ipmj/gui/art.html>

### 3. 解説「安心の村は自律の村」

山深い村。人口2000人のうち、高齢者が40%近い過疎の村。一見暗いイメージを抱かせるこの村で、高齢者が大切にされている。元気な老人はのびのびと仕事をし、介護を必要とする人には、村が心温まる手立てを尽くしている。

平家の落人が住みついたと、言い伝えのあるこの村は、追っ手の目から逃れるにふさわしい程に、貧しさと戦いながら生きぬいてきた。

昭和初期の生糸の暴落は、村の主産業である養蚕農家を直撃したが、その時に、小学校の教師からの寄付と、それに応えた村民の熱意で、世にも稀な「学校美術館」\*が誕生した。それは「貧しても食しない」心構えを涵養する基となった。

\*現・泰阜村立学校美術館

<http://www.mis.janis.or.jp/~yks/bijyutsu/frame.html>

（旧美術館をクリックすると昭和29年（1954年）に建てられた美術館が紹介されています。）

時が過ぎ、昭和14年、当時の国策「満州農業移民」を受けることで、村の過密人口から脱出しようと、満州への分村移民が行われた。しかし数年を経ずして敗戦。敗戦時の在籍者1139人のうち、632人の犠牲者を出し、同時に多くの残留孤児や残留婦人を産むなど、極めて悲惨な結末で終わった。

高度経済成長の流れの中で、村の過疎化が進み、今では（2004年10月1日現在）人口2115人、うち、高齢者は799人（38%）である。

村独自の政策で、10年ほどの間、在宅介護を無料で実施してきたが、その後  
に介護保険制度が始まった平成12年からは、受益者負担の利用料の60%を村が  
負担している。

町村合併をすると、この村独自の福祉事業を継続して維持することは適えら  
れず、ために国の推進する合併のルールには乗らずに、自律の精神で頑張っ  
ている。これも、国策に沿って多くの犠牲者を出した「満州分村移民」の悲劇が  
教訓になっているのである。

村長の言では、「国策に添うよりも、村民を守るための努力こそが、地方自  
治の原点。高齢の村民は<村に迷惑をかけるなあ>というが、嘗ては、その  
人たちが汗して働き、税金を払って、国や村を支えてきたのですから」と。

大洞東平は2000年の春から足しげく通って取材をした。これはそのレポート  
である。

<参考リンク>

泰阜村公式サイト

<http://www.vill.yasuoka.nagano.jp/>

-----

◆大洞東平（おおぼら とうへい）氏略歴

<http://www.tsukiji-shokan.co.jp/mokuroku/chosya/oobora-touhei.html>

1930年、東京都中野区生まれ。

1952年、東京農林専門学校（現、東京農工大学）獣医畜産学科卒業。

1957年、栃木県那須山麓酪農業協同組合連合会に勤務、獣医師として活動。

1962年、栃木県那須町大同に移住し、酪農業を自営するとともに獣医業開業。

1989年、日本リアリズム写真集団附属・現代写真研究所に入り、同所課程を

1993年に卒業。

◆主な著作：『銃を持たされた農民たち…千振開拓団、満州そして那須の62年』

築地書館 4660円 B5判 206頁 1995年10月発行

<http://www.tsukiji-shokan.co.jp/mokuroku/ISBN4-8067-6744-1.html>

棄民といわずして何か……その顔が語りかける。

国策によって満州に入植した武装移民団は、根こそぎ動員により  
老人、病人、婦女子のみで終戦をむかえた。

集団自決、残留孤児・婦人など、苦難の逃避行の末、母国への

生還者はごくわずかだった……

132 枚の写真と彼らの生の声でつづる貴重な証言写真集。

第二回酒田市土門拳文化賞奨励賞受賞作品を集成した

(略歴・著作は、築地書館サイトから引用)

<http://www.tsukiji-shokan.co.jp/>

---

<エッセイ・世のなかに光るもの> 最近快かったこと

---

最近の新聞やテレビのニュースは暗い。農林行政もあてにならない世の中である。大企業もとんでもない失態をやる。次々と品行のなさばかりが目につき、世の中の手本になるものがなかなか現れない。人びとも、その無責任さの影響を受けるのは当然である。

人に会っても挨拶も交わさない。ひとの足を踏んでも何も云わない。犬の散歩での落とし物を片づけない。自転車は歩道をとばし、歩行者が危ない。駐車禁止と書かれた真ん前に車を止めて置き、釣りをするべからずと書いてある看板の下もで釣りをする。何のための掲示だろうか。人が監視しているとやらないが、無人だとわかれば何をしてもかまわない。そんな光景が目立ってきている。若い世代ばかりではない。自分と同じ昭和初期世代の人にもどうも脱モラルの例が多いようだ。これは形式だけが先行する社会と、それに適合しない生活スタイルが原因かも知れない。

カタカナ外国語ばかりで日本語が少々の宣伝広告が最近多い。官庁の部局にも難しい横文字が横行する。あたかも日本語を恥ずるかのよう。日本の文化全体が軋んでいる。こんなことを言うのは私が年を取った証拠であろうか。

しかし、このような憂鬱に負けずに光るものもある。その一つ。正月に新春コンサートのテレビ放送があった。ウイーンからの恒例のものであるが、この音楽会では最後にラデツキー行進曲という軽快な音楽でオーケストラと聴衆が一緒になって手拍子よろしく楽しく終わる習わしらしい。だが今年はずっとちがった。冒頭の指揮者の挨拶で、大津波の災害をうけた多くの人々に対し哀悼の意を表し、この最後の音楽を割愛するというのである。何と細やかな配慮であろう。まだ、こんな優しさが残っていることに感動したのである。また最近みた日本と北朝鮮とのサッカー試合では、ぶつかって倒れた選手に手をさし

のべていた。こんな些細なことが大きな意味を持つように思える時代なのだと気付くのである。

暴力には暴力で対抗する。世界の平和のためと称する戦争。宗教は争いの道具にされる。人種偏見が未だに残っている。温暖化対策でも世界が一致できない。このような混乱のなかで「戦争放棄」の勇氣ある強い意志が人類に明るい希望を与えている。これに賛成できない人には平和を語る勇氣すら無いように思える。

安富 六郎

山崎農研会員、電子耕編集同人

y.nouken@taiyo-c.co.jp

---

<79歳の意見> 農政改革にあたって戦後60年を省みる。

---

日本農業は重大な曲がり角を回りつつある。  
それは、戦後の農地改革以来の大変革になると言われている。

農政改革の必要性は、食に対するニーズの多様化と高度化、農業の多面的機能に対する期待の高まり、農業農村における新たな動き、グローバル化の進展が強調されている。

これらの論議をする前に、日本農業は60年の間にどのように変わってきたのか。変わらないものは何か。を見ておく必要がある。

たまたま、ここに農業雑誌の代表とも言える『現代農業』が700号を迎えて、戦後60年の変遷を総括している。

以下、2回にわたって、60年の歴史を振り返ってみたい。

<参考資料> 『現代農業』2005年2月号(700号) 主張(全文)

<http://www.ruralnet.or.jp/syutyu/2005/200502.htm>

◆ 1、啓蒙から農家自身の作る雑誌へ

戦後60年の変化を『現代農業』に見る。

敗戦の翌年から農業雑誌は立ち上がった。1946年（昭和21年）5月号「農村文化」は復刊1号を発行した。「現代農業」はそれから700号になる。これをたどることは、戦後農業60年の変貌をみることになる。

1) 戦後農政の課題は農地改革と農村民主化であった。

この年、「農業朝日」をはじめ「若い農業」など、雨後の筍のように、多数の農業雑誌が大量に出版された。「農村文化」は農村民主化を特集し、多くの革新的執筆者をそろえて、農民に役立つ文化運動を模索して、農村の読書運動を進めていった。

他社の雑誌も、多くが農政問題に力を注ぎ、農政ジャーナリストが登場していた。

しかし、長くは続かなかつた。農政経済を中心とする啓蒙雑誌は、10年を待たずに消えていった。最も有名で有力であった「農業朝日」が廃刊になったのは13年目、3万部であった。

農文協図書館「戦後農業雑誌の変遷」

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/08nogyouzasshi1.html>

2) 農地改革が終わって、農家が求めるものは、文化評論ではなく、生産に関する農業技術と経営の雑誌であった。

「農村文化」は農家を巡回し、直接農家の意見を聞き、購読を進める直接普及を行っていた。

1950年(昭和25年)の新年号39号から始まった浪江虔の肥料の使い方についての連載が好評で、後にまとめた『誰にもわかる肥料の知識』は10万部という当時としては記録的売れ行きを示した。

当時出回り始めた化学肥料を無駄なく、上手に使うための科学的知識をわかりやすく表現したものであった。

豚の飼い方についても、どのようにしたら儲かるかの農家の発想に基づいた記事が求められた。読者である農家が雑誌の性格を変えていった。

浪江虔（なみえ けん）1910～1999 略歴と主な著作

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/079namiebunko.html>

3) 「農村文化」から「現代農業」へタイトルが変わったのは、1960年、(昭和35年)であった。1961年農業基本法が施行され、農業の近代化が宣伝された。畜産の多頭飼育が叫ばれ、果樹・野菜の選択的規模拡大が進行した。

その中で、稲作農家は、コメの増産意欲が高く、山形県の片倉権次郎さんの五石どり稲作に熱心に取り組んだ。農家の発想から農民的技術体系を農民自身の手で積み上げていった。

この過程で、毎年1万部の増部を重ね、69年(昭和44年)には14万部を達成した。こうして農家の立場に立つ技術・経済雑誌として発展していった。

そんな「現代農業」に転機が訪れたのは、1970年代である。

(以下次号に続く。)

<参考リンク>

(社)農山漁村文化協会「現代農業」

<http://www.ruralnet.or.jp/gn/>

(ちなみに、「主張」は、1995年1月号掲載分から最新号まで、

<http://www.ruralnet.or.jp/syutyo/>

で、発行年月日をクリックすれば全文読める。)

農文協図書館「農文協の雑誌『現代農業』の変遷」

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/nbk/gn1.html>

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

<http://nazuna.com/tom/>

---

<日本たまご事情> その日のタマゴを食べると金運に恵まれる

---

岡部町の養鶏場にタマゴの直売所を併設してからもうかれこれ10年になるだろうか。

最初のうちはご近所の人たちに「せっかく養鶏場があるのだから産みたてのタマゴをわけて欲しい」から始まった。こちらにとってはいちいち小売に立ち会っていたのでは仕事にならない。そうかといって日頃臭気ハエなどで時々ご近所に迷惑をかけているのでそう無碍にもできない。いっそのことタマゴの直売所を独立させてしまおう。だが、ちっぽけとはいえ店をかまえ専門の人にやってもらいとそれなりに採算を取らねばならない……。多くの養鶏場によるタマゴの直売所はこうして始まったものであろう。

10年もタマゴの小売をしているといろいろと面白いことにぶつかる。「2005年1月20日産卵のタマゴを食べると金運に恵まれる」。Dr.コパなる風水の先生がテレビでのたもうたそうだ。

その日、タマゴの直売所はタマゴを求める客でごったがえした。口々に「これは今日産んだタマゴでしょうね」と念をいれていたそうだ。いつもは一日40〜50名のお客さんでひっそりしているのに、この日は倍近くになった。年齢も若い人たちだけでなく、かなり年配の人たちもいたと言うから驚く。占い風水をゲーム感覚で楽しんでいたと現場の報告。

私どもの業界は鳥インフルエンザでひどい風評被害をテレビ報道によって受けたが、これはテレビによる逆風評被害である。私はニュース以外ほとんどテレビを見ないが、少しはテレビを見ることとしよう。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

---

<ミニ解説> 農業・農村の組織とその役割 (4) ー農協ー

---

農業協同組合ですが、一般に「農協」と通称され、また近年はJ A (Japan Agricultural Cooperatives) とも呼ばれています。

農協の設立と運営は、昭和22年制定の農協法に基づいてなされています。その役割を一口に言えば、組合員である農家の相互扶助組織で、事業領域は営農と生活にかかわる下記のような各種のサービスを行うことにあります。

- (1)農業の経営・生産技術等についての指導事業
- (2)生産資材の仕入れや農産物の販売を行う購買・販売事業（経済事業）
- (3)災害により生じた損害や遺族の生活保障等を行う共済事業
- (4)預金や農業経営資金等の融資を行う信用事業

農協には、大別して上記の各種領域の多くを対象に業務を行う「総合農協」と、特定の農産品目の販売を行う等の「専門農協」とがあります。農村定住者に広く身近な存在になっているのは、前者の総合農協です。

農業の盛んな農村地域においては、農機具店・種苗店・肥飼料店などの各種の商系のお店が、永年にもわたって営業を続けられ、顧客である農家と歩みを共にされております。

でも、一般農家はその営農と暮らしに密着して、いわば拠り所のような関係としている割合は、農協とされるものの方が高いように思われます。農協においては、上記のような幅広い領域で業務が行われており、それが主たるその理由となっております。

また、農協を構成するのは正組合員の農家ということですが、非農家であっても準組合員などとして農協の行ういろいろな事業への加入者（受益者）になり得ます。農協は、いわば農村版の「生協」、といった側面を持たれていると言えましょう。

石川 秀勇  
山崎農研会員、野田市在住  
y.nouken@taiyo-c.co.jp

---

<編集後記・同人の近況報告> 2月10日～2月23日

---

家族で野外遊びグループに参加している。荒川河川敷を主なフィールドとし、子どもたちといっしょに野草つみ体験や自然観察を行なうグループだ。先日、この河川敷のゴミ拾いが企画された。1年間お世話になりましたという気持ちをこめでのゴミ拾いである。

ゴミで多いのは空き缶や煙草のすいがらだ。リーダーが「すいがらを捨てる

のはだれかな？」と子どもたちに質問をなげかけると、一人の子がわたしを指さした。たしかに煙草は吸ったが、携帯灰皿にきちんとおさめたのだが…

最近、喫煙族の肩身はともかくせまい。外に出ると吸う場所をみつけるのに苦勞することも少なくない。リーダーが言いたかったのは「ゴミを捨てるのも人、それを片付けるのも人」だと思っただが、後ろ指をさされた(?) おやじを息子たちはどう見たらうか。(山崎農業研究所会員・田口 均)

---

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

---

- 1、件名(見出し)を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
- 3、1回1テーマ、10行位に。
- 4、ホームページを持っている人は、文末にURLを。
- 5、JIS X0208 規格外の文字(機種依存文字)のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

---

◎投稿アドレス変更のお知らせ

---

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

[y.noken@taiyo-c.co.jp](mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp)

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

-----  
次回 154号の締め切りは3月7日、発行は3月10日の予定です。

---

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

---

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735円 発行日：2002年10月4日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

---

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html)

<本誌記事の無断転載を禁じます>

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第153号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag2.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html)

2005.02.24（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

\*\*\*\*\* ここまで『電子耕』 \*\*\*\*\*